

環境芸術の研究 —社会的機能と可能性—

Vol. 2

A Study on Environmental Art and Design

—The social function and Possibility—

Vol.2

高須賀 昌志 (教育・助教授)

TAKASUKA Masashi

1 研究の目的

本研究代表者はこれまで、「制作者の一人」として環境芸術の制作及び調査・研究を進めてきた。そのなかで、環境芸術が持たなければならない社会性や公共性、市民との高いコミュニケーション能力が要求される必然性などを明らかにしてきた。本研究はそうした特性が現代社会においてどのような役割を担い、環境芸術が触媒としてどのような作用を促すのか、また、その可能性が今後どのように広がっていくのかということについて明らかにしようとするものである。

表象芸術は個の美的価値を様々な表現媒体によって創造・表現しようとする人間の活動であり、人間の所産である。作者の言葉にすることの出来ない思想、主張、心情、気分、などを表現・伝達する手段の一つとして存在している。また、「気」「雰囲気」「気配」「ムード」「暗示」など人間の五感を対象とした表現行為であると捉えることができる。環境芸術はその成立の前提として、そうした表象芸術が持つ本来の機能を、公共性、地域性、それらの目的性がゆえに顕著に具現化し社会的機能を果たしている。表象芸術のなかでも環境芸術は最も社会と密接かつ恒常的に関係が存在すると考えられる。従来の表象芸術の領域区分が表現媒体によってなされていたことに比較し本研究では環境との関係に焦点をあて、社会との関係性や、地域文化・風土との関わり、具体的な実社会への反映という観点によっておこなうことによって、「場」に対する影響力、そこに関わる「人間」に対する浸透力を実証し、現代の社会環境を形成する上で重要な役割を担っていることを明らかにしようとするものである。

2. 研究経過

■本研究に関連した研究

●科学研究費補助金

基盤研究 (C) 期間：平成 17 年度～平成 19 年度 課題名：環境芸術の研究 —社会的機能と可能性—

若手研究 (B) 期間：平成 14 年度～平成 16 年度 課題名：実践に基づく美術教育における鑑賞教育の研究 —環境芸術を題材に—

● 埼玉大学総合研究機構研究プロジェクト

若手研究 期間：平成 16 年度 (9 月～3 月) 課題名：環境芸術の研究 —社会的機能と可能性—

基礎研究 期間：平成 18 年度 (9 月～3 月) 課題名：環境芸術の研究 (社会的機能と可能性) —鑑賞教育プログラムへの展開—

■これまでの研究経過及び研究成果

『環境』を単なる景観や造形的諸要素、あるいは環境汚染と言った物質的側面 (外なる環境) だけで考えていくことは出来ない。「内なる環境」と言い表すことの出来る人間の精神や感情、“思い” といったいわば目に見えない問題を扱

っていかなければ解決には至らないのではないか。『環境』を縦軸に『芸術』を横軸に据え、その交点に何があるのかということを考えていくことが『環境芸術』を紐解いていくことだとすると、その縦軸たる『環境』を考えるとということは「内なる-」「外なる-」の共通項であるその時代、その瞬間を切り取るが必要となる。しかしその時々善し悪しを押し量ることではなく、その時の『環境』をどのように捉え、どのような解答を導き出さんとするのか（あるいはどのように導き出してきたのかを含め）ということが『芸術』に課せられた課題であり『環境芸術』の核心であろう。前回の報告書の中で環境芸術と“風土”との関わりについて、『環境と文明』についての議論や『文明の環境史観』によって示されている文明と風土との密接な関係性について一つの観点としたい旨を報告した。文明と文化を同列に考えることは出来ないながらも、文化の大部である芸術においてもまた、地域性や気候風土との強い関わりについて考えないわけにはいかない。「環境から文明を考え、人類の将来にとって持続可能な文明とはいかなるものであるのか」という使命感を含んだ思考の道筋と同様に、「環境から芸術を考え、あるいは環境と芸術の“関係”について考えること」が、表象芸術の将来像を導き出す一つの重要な手だてとして考えられその道筋を示すものとして重なってくるように感じている。グローバル化が叫ばれながら一方ではローカルな地域の風土に根ざした文明論が注目されているのを見て、今後益々表象芸術においても『環境』というキーワードが重要なテーマになっていくであろうことを（直観的にはあるが）確信している。『環境』というフィルターを通すことは、その表現は必ず社会性を帯びていくことであり、コミュニケーションという観点でいえば、表象芸術の中にあつて極めて高い疎通力を持たざるを得ない媒体であることは間違いない。『環境と文明』の議論に触れ、あらためて『環境』という言葉の持つ意味について精査する必要があるとともに、現在までの環境芸術が何を成し得てきたのかということについて、特に風土という観点において再考をする必要を感じているところである。本研究では環境との関係に焦点をあて、社会との関係性や、地域文化・風土との関わり、具体的な実社会への反映という観点によって分析を進めている。

3. 研究成果の概要

環境芸術の根本的な存在意義を考察する上で、今年度は手始めとして都市文化の未発達あるいは自然環境が都市化せず、いわゆる大自然が残されている地域の文化に触れることから考察をスタートさせた。環境芸術を考えると、通常その基底にあるのは「都市環境」であり、日本に在住する研究者にとってみれば、現在身を置く社会環境下での芸術のはたらきがひとつの尺度となる。しかしながらどのような社会環境にあつても人間と芸術の間におこる作用は、人間が社会を形成する際に常に密接な関わりを持ってきたことは歴史的にみても明らかである。だとすれば都市化という枠組みで捉えきれるものではなく、人間の原初的な営みや土俗的な文化、あるいは大きな意味における文明（宗教等を含めた）を考えていく必要がある。「環境と文明」の相互関係や「環境人類学」「環境考古学」などの新しい学問領域の視点を活用していく必要性を強く感じているところである。「芸術」という定義を従来の表象芸術で語られるところの絵画、彫刻といった純粋芸術に加え、デザイン、建築についても社会的機能を持つものとして評価が必要になってきている点は当然であるが、いずれにしても環境、芸術の中心にある「人間」・「自然」という根源的な問題を踏まえないわけにはいかない。現代の社会環境において、「環境芸術」＝「社会と密接に関わる芸術」が、重要な指針を社会に提示していくためには、人間にとってより広範な通底する問題に取り組む必要がある。当初、環境と芸術との関わり方を3つの形式に分類し、各年度に一つの型をテーマとし、国内外の抽出すべき対象を複数設定し関連の資料・文献について調査を行うこととして、今年度は『有形：都市型および美術館型 事例研究』の対象となる数カ所の事例研究をおこなったが、上記のような観点から根源的な問題に立ち返って考察を試みる必要性から、あわせて原初的な芸術についても（特にアフリカ美術）資料収集および現地調査をおこなった。

本研究は上記のような研究経過を経て最終的に科学研究補助金による同課題の研究と連関させ、平成19年度末に『環境芸術』を総論としてまとめる予定である。

また、冒頭に記した通り本研究者は「制作者」の一人として本研究テーマの成果を実践につなげることを目的としている。ここでは平成17年度に研究者自らが制作した、『環境芸術』の3件の実践のうち、本学に直接関係する事例を報告することとしたい。

実践報告 『大学における環境芸術の試み 一地二ノゾミ知ヲマトウ（埼玉大学における実践）』

国立大学は2004年に法人化され、国公立大学間の熾烈な競争にさらされることになった。重ねて少子高齢化社会を迎え、進学希望者の獲得はもちろんのこと、産官学共同や地域貢献など、大学の存在意義を強く社会にアピールすることが必要になってきた。そうした背景のもと埼玉大学でも2005年11月に“埼玉大学再構築計画”が編まれ、大学のイメージアップを諮ることが謳われ、『外部から見た埼玉大学のイメージとして「社会に出てから伸びる人材を育成する大学」「特色ある研究を行っている大学」「地域から頼りにされる大学」「国際交流が盛んな大学」などを定着させ』新しい大学像を確立することが要諦とされた。『埼玉大学の進むべき方向を表す標語、シンボルマーク、学歌を定め、モニュメントを正門付近に立てる。』ことがその具体的施策とされ、その一部（モニュメント、シンボルマーク）が美術を専門とする教職員である私に付託されたものである。

“再構築”の本旨は、財政、人事、施設整備、教育・研究組織などの既存の制度や枠組みを再構築することにある。それら大学経営上の時間のかかる困難な課題に先んじて“目に見えるかたち”としての成果を表すことがシンボルマークの策定やモニュメント設置に求められた。2005年11月下旬にスタートして翌年4月の入学式には間に合うことが与件とされ、一般的なスケジュールと比較するとかなりタイトなものであったと言えるだろう。このことは手が付け易く、成果が分かりやすいという施策性質上の問題に加え、“再構築”の最後に記されている学長の言葉『多数の教職員・学部学生・院生からなる全学的意思統一は至難の業であることに加えて、更に大きな障害がある。それは、人は誰でも変化を嫌う本性を持っていることである。これは意識改革を阻む「内なる敵」であって、今や埼玉大学構成員一人ひとりに「内なる敵」と戦って勝つことが求められている。』に表れているように、これらの施策が構成員に対する意識改革を促す方策として位置づけられていることに起因していることは明らかである。モニュメントを設置することが正門付近の景観や環境整備に寄与することや、シンボルマークを策定することで進学を希望する高校生を含めた大学外部に対するイメージの発信をおこなうといった、大学を取り巻くコミュニケーション環境の整備にはたらくことを考えれば、これらの作業がまさに『環境芸術』の範疇であると考えられる訳であるが、同時に、こうした作業をおこなう前提として「内部の意識改革を促す」と言った、いわば「内なる環境」に対するはたらきを担うものとして、施策をおこなう側にその意思が存在し、大なり小なり環境芸術がこうした問題と不可分であることを再認識させるものであったといえる。環境芸術の“環境”“芸術”というそれぞれのワードに含まれているものに加え、それらが結びつくことで生じるはたらきについて考えていく必要性を改めて強く感じるものであった。

ロゴマークおよびモニュメント共通コンセプト

『地にのぞみ、知をまとう』

古く埼玉は「さきたま」と呼ばれ、「前玉」「幸魂」「前多摩」などいくつかの諸説が由来とされてきました。「さき」は前方・突端・先端を表し、臨む・立つ・発すると結びつく言葉であり、「たま」は宝玉・勾玉・魂などを意味し、宝・心・地球といった印象を与えてくれます。いうなれば「さきたま」とは、幸せな生活、社会、未来を築くためのプロローグであり、そのための見識、姿勢、行動といったポジティブな生き方であると解釈できます。すでに半世紀以上、埼玉の地において教養・教育・経済・理学・工学といった分野から教育研究活動を続けてきた埼玉大学は、この「さきたま」に込められたマインドを常に実践してきた大学であります。日常的に都心とコンタクトできる緑多い落ち着いた環境のなかで、幸せな生活・社会・未来を見据える知性豊かでグローバルな人材を育て社会に送りだしてきました。埼玉大学は『地にのぞみ、知をまとう』という考え方を通じて、これからも地域からの信頼を得る国際交流が盛んな大学として、学生一人ひとりのポジティブ・マインドを表出させながら見識を深め、社会に、未来に貢献していきたいと考えます。本学の所在地である大久保という「地」は、古くは本村遺跡にみられる住居群、さらに大学移転直前まであった村の中心地としての神社、そして現在の埼玉大学にいたるまで、長くにわたって常に多くの人が集い様々な活動が営まれてきた場であります。このことは、人の営みが集積され、交流し、社会に還元されていくといった一連の動きやはたらきをつくり出すのに適した場であり、そうした“力”をこの地が持っていることの証であると考えられます。まさに「地にのぞみ、知をまとう」にふさわしい“場”であるといえるでしょう。モニュメントは「知」の象徴として、様々な研究や学問分野に関わる記号をモチーフに穴を穿ち、大学の持つ多面性を形象化しました。穿たれた多くの穴は「交流」や「開かれた姿勢」のメタファーであり、昼は太陽光、夜はライトアップによって、美しい陰影が映し出され、様々な表情を生み出す造形として機能しながら同時に自然や時間を感じる手だてともなります。ロゴマークとモニュメントはそれぞれが連関し、相乗的に埼玉大学のイメージをアピールすることをねらいとしています。

■シンボルマーク策定

基本デザイン/全体統括 高須賀昌志 マニュアル/アプリケーションデザイン 株式会社環境計画研究所、株式会社パール ローソン店舗関連サインデザイン 株式会社ローソン店舗開発サポート部建築施工管理部

■モニュメント『地ニノゾミ知ヲマトウ』

デザイン/全体統括 高須賀昌志 制作/設置 エー・アイ・エム株式会社

■埼玉大学ロゴマーク及びカラーシステム

〈制作環境〉システム/MacOS J-9.2.2 ソフトウェア/Adobe Illustrator 8.01J

□ロゴマーク基本(縦組タイプ)



□ロゴマーク(横組タイプ)



□ロゴマーク基本(縦組タイプ)



□ロゴマーク(横組タイプ)

